

令和7（2025）年度リーディングプロジェクト報告書

1. プロジェクト名 「芸術文化を観光対象とする観光の特徴」の予備調査

2. 代表者氏名 大社 充

3. 分担者氏名 大野 はな恵

荒木 利雄

4. プロジェクトの概要

本研究では、芸術文化観光には、どのような特徴があるのかを明らかにするため、実際の取り組み事例（豊岡演劇祭）において、特定の仮説に基づいたデータ収集と検証を行うこととする。本研究は、ある側面から実証的な調査研究を行うことで、芸術文化観光の研究を進める上での議論の敲き台となる基礎資料を作成することを目的とするものである。

5. 成果の報告

大野は、「地域への創造的関与——演劇祭におけるアーティストの経験と変容」をテーマに、分析・考察を進めることとした。従来のフェスティバル研究では、観客数や経済効果など数値で測れる成果に関心が集まりがちであり、そこに滞在するアーティスト自身がどのような経験をし、創作にどう影響を受けたかという視点は十分に扱われてこなかった。こうした問題意識から、豊岡演劇祭に参加したアーティストや運営関係者を対象に半構造化インタビュー調査を実施した。質問項目の設計にあたっては、英国アーツカウンシル等で採用されている国際的な文化評価指標Culture Countsを参照している。得られたインタビューデータは、質的分析ソフトNVivoを用いて整理・分析を行い、現時点で「地域との出会いと創作の変化」「運営体制とサポート」「課題と今後の展望」という3つのテーマを抽出した。

荒木は、「芸術文化観光研究：豊岡演劇祭の事例を通して」について、経営学の観点からアプローチを試みることにしている。具体的には、サブ研究テーマとして「産官学の相互作用による地域イノベーション創出の観点からの考察」を設定し、分析・考察を進めることとした。豊岡演劇祭は、主要な組織（アクター）である行政（豊岡市）、地域企業（但馬地域）、経済団体（豊岡商工会議所）、芸術文化観光専門職大学等で構成されている豊岡演劇祭実行委員会委員により管理運営されている。本研究では分析枠組みとして、Etzkowitz & Leydesdorf（1995）が提唱したTriple Helixモデルを用いることとした。Triple Helixモデルでは、大学、産業界、政府という3つのアクターの相互作用により、どのようにイノベーションが促進されるのかが提唱されている（Etzkowitz & Leydesdorf, 1995）。また、関係者にインタビューを実施しており、その結果については、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いた分析・考察を行う予定である。

令和7（2025）年度リーディングプロジェクト報告書

1. プロジェクト名 対話的コミュニケーション能力とは何か

2. 代表者氏名 平田 知之

3. 分担者氏名 石井 路子

鎌田 麻衣子

田上 豊

山内 健司

姚 瑶

4. プロジェクトの概要

本学のカリキュラムポリシーとディプロマポリシーには「対話的コミュニケーション能力」の育成が掲げられている。しかし、この能力が具体的に何を指すのか、開学5年目の今も教職員間で十分な合意形成には至っていない。本プロジェクトは、「対話的コミュニケーション能力」を個人だけのスキルだけではなく、組織の構成員が持ち味を活かし創造性を発揮できるような組織作りに関わる力なのではないかという仮説に基づいて検証する。

調査は、豊岡市の小・中学校で実施されているコミュニケーション教育（例：小学校低学年で計7時間、小6・中学1で年間14時間）の観察・聴き取りから始まっている。加えて、本学が高1対象に行っているコミュニケーションWS（年2回・各2時間）の参加者アンケート分析、及びこれらの事業と本学コミュニケーション演習のファシリテーターへの聴き取り調査も行う。

これらの調査から、小中高大にわたるコミュニケーション教育を比較し、育成を目指す能力の共通性や系統性を探る（タテの広がり調査）。また、同一年齢層における育成される能力を深掘り（ヨコの広がり調査）することで、「対話的コミュニケーション能力」の具体的な要素と育成方法の明確化を目指す。

5. 成果の報告

豊岡市の小・中学校で実施されているコミュニケーション教育のうち、低学年向けの非認知能力向上対策事業におけるフィールドワークが調査研究の中心となった。以下は、その成果報告である。

対話的コミュニケーション能力とは何か―兵庫県豊岡市小学校の演劇ワークショップを対象として

1. はじめに

本稿は、リーディングプロジェクト「コミュニケーション教育」の一環として行った兵庫県豊岡市の全公立小学校1・2年生を対象に実施されている演劇ワークショップのフィールドワークを元に、豊岡市の実践的独自性を記述し、理論的な位置づけを試みる研究ノートである。

演劇的手法を用いたコミュニケーション教育は、文部科学省コミュニケーション教育推進会議（2010～2011年）を契機に全国的な注目を集めた。同会議はコミュニケーション能力を「異質なメンバーで構成されたチームで正解のない課題に取り組み、最適解を創出する力」と定義したが、各地の取り組みの多くは単発的・イベント的な実施にとどまることが多かった。これに対し、豊岡市の実践は教育委員会主導で全校・全学級での継続的实施を維持しており、制度的にも方法論的にも全国的に類例がない。

しかし、この実践を学術的に記述した研究はほとんど行われていない。先行研究は演劇ワークショップで「何を」行うかという内容論に偏重し、「どのように」行うかというファシリテーションの方法論はあまり議論されていない。本稿は、この空白を埋めるための予備的考察である。

2. 理論的枠組み

本実践の理論的位置づけを明らかにするために、まずコミュニケーション観と学習観の整理が必要である。

コミュニケーション学では、4つの視点が区分される。第一に、送り手から受け手へメッセージを伝達する「線状モデル」（機械的・心理的視点）。第二に、AとBが相互に影響を与え合い「意味」を構成する「相互作用モデル」（構成主義的視点）。第三に、AとBを含むシステム全体で捉え、繰り返されるコミュニケーションのパターン＝「文化」のルールを調整するものとしてコミュニケーションを理解する「連鎖反復モデル」（システム論的視点）である。

学習論にもこれらに対応する3類型がある。行動主義（知識は教授者から学習者に伝達される）、構成主義（知識は学習者が相互に構成する）、そして「状況の中の学習」論（共同体への参加を通じてアイデンティティが変容していく）である。状況論的学習では、学習者は共同体の周辺で見よう見まねを始め、次第に中心へと移行し、やがて共同体の文化やルールそのものを変容させる力を獲得する。

今回、豊岡市の実践に適用するのは、システム論的コミュニケーション観と状況論的学習観の組み合わせである。相互作用モデルでは、既存の社会的規範への「適応」が暗黙に前提されるが、豊岡市の実践は参加者自身が場を変え、社会を変えていく力の涵養を志向している。

3. 制度的独自性

豊岡市の演劇ワークショップは、小学1年生の6月・10月・2月に各45分の計3回、2年生では45分2

コマを2回、合計5回のプログラムから構成される。この実践の制度的特徴は以下の5点に整理される。

第一に「公定性」である。教育委員会がプログラムの作成、実施調整、本番の立ち会いまでを主導する。年間105回のワークショップすべてに指導主事が立ち会う体制は全国的にきわめて珍しい。第二に「悉皆性」であり、全学級で同一プログラムが実施される。ただし同じやり方で行うわけではないため、「統一性」ではなく「全員やっている」という意味でこの語が選ばれている。第三に「柔軟性」である。プログラムは各回ともほぼ一行で説明できるほどシンプルであり、そのシンプルさが学校・学級・個々の児童の実態に応じたファシリテーションの調整を可能にしている。第四に「協働性」であり、演劇の専門家が必ずチームでファシリテーションを行う。第五に「省察性」であり、事後に担任・専門家チーム・指導主事が個々の児童の様子にまで踏み込んだ振り返りを行う。

4. ファシリテーターの立ち位置

ファシリテーターは「先生ではない」という点がきわめて重要である。この立ち位置をいわば「親戚のおばちゃん」。3～4か月ごとにやってきて子どもの変化に気づく存在であり、たまに来るからこそ毎日会う担任には見えない変化を捉えられる。また、子育ての日常的責任を負っていないため、ワークショップ中の寝転びなど普段の授業では許容しがたい逸脱も「今日だけだからね」と受け入れることができる。

学校の教員は一人で数十人を見なければならず、全員がばらばらに「ありがたい姿」でいると授業が成立しない。外部のファシリテーターはこの制約から自由である。下の名前をひらがな呼び捨てにする名札の使用も、日常とは異なる特別な時間を創出する仕掛けとなっている。公立小学校では「君」と「さん」の使い分けすらジェンダーの観点から困難な現在、呼び捨てという選択は「先生ではない」存在だからこそ可能である。

同時に、ファシリテーターは個々の児童を丁寧に記録し、次回の訪問前にはそのメモを必ず確認して現場に入る。親しみやすさと専門的な観察眼の両立がこの実践を支えている。

5. ファシリテーションの方法論

すでに述べたとおり、ワークショッププログラムの内容は先行研究でも議論されてきたが、方法論についてはほとんど共有されていない。

ファシリテーションには個々の「芸風」に依存する部分と、根本的に共通する部分がある。たとえば、ある主講師は経験豊富で安定した運営ができる反面、先読みをする傾向があり、もう一人は「隙が多い」がゆえに面白い出来事が起きやすい。熟練者だけがうまくいくわけではなく、プログラムのシンプルさがファシリテーターの多様性を許容している。

ファシリテーターの芸風を超えて共通する反復パターンとして、以下の3点が挙げられる。第一に、個々の児童の現在の参加の仕方を尊重することである。仲間集めで4人しか集まらなかったグループに対して、教員はもう1人を連れてきてしまうが、ファシリテーターはそうしない。児童が自分たちで解決策を考えるまで待つ。第二に、個別的な見取りに基づく働きかけである。自己効力感伸長モード、省察促進モード、人工サバンナモード（適応課題）、着実モード（技術課題）という4つのモードが報告されている。第三に、「自分にはどう見えるか」という演劇の本質を基底に置くことである。

他者の演技に対するコメントは、最初は大人が行い、次第に子どもに委ねられるが、その質は「面白かった」から「何に見えたか」へと変化していく。この変化はファシリテーター的な身振りの芽生えとして位置づけられる。

6. 能力は個人だけのものか

報告者が提起するもう一つの重要な論点は、コミュニケーション能力や自己効力感を「個人だけの能力」として捉えることへの疑義である。

高校生約2,000人を対象とした予備的な自己効力感調査では、小中学校時にワークショップを経験した豊岡市出身者と未経験者の間に、初発のスコアに有意な差は見られなかった。報告者はこの結果を、自己効力感が「はじめましての人の中では持てないもの」とであると解釈する。高校に進学して間もない段階では新しい集団に馴染んでおらず、「できる」と感じるのが困難なのは当然である。実際に2回のワークショップ後にはスコアが上昇しており、自己効力感の発揮には、それを可能にする「場」の存在が不可欠であることが示唆される。

ここから導かれるのは、コミュニケーション能力を個人だけに帰属させることの問題性である。否定的なリアクションが支配的な場では、いかなる個人も発言を控えるようになる。能力の発揮は「場」の性質に大きく依存している。報告者はこれを「場そのものの能力」と表現し、豊岡市の実践が育成しているのは個人のコミュニケーション能力ではなく、「自身を含めた全員がやりたい姿のまま活躍できる場を創出する力」とであると結論づける。

ワークショップに繰り返し参加するうちに、大人のファシリテーターが何をしているかを観察し、仲間の状況を見取って報告するなど、ファシリテーター的役割を担い始める児童も出現する。これは正統的周辺参加モデルにおける、周辺の参加者から中心的参加者への移行として理解できる。

7. おわりに

本稿は、豊岡市の演劇ワークショップの独自性を、制度的側面（公定性・悉皆性・柔軟性・協働性・省察性）とファシリテーションの方法論的側面から記述し、システム論的コミュニケーション観と正統的周辺参加論を理論的枠組みとして位置づけることを試みた。

残された課題は多い。ファシリテーションの「どう」に関する記述の精緻化、ファシリテーターの属性や演劇観とプログラムの関係の解明、そして「場の能力」という概念の理論的精緻化が、今後取り組むべき主要な論点である。とりわけ、この実践が「やってもらうとすぐわかるが、言葉で言われるとわからない」という性質を持つことは、言語化の方法そのものの検討を迫っている。本稿が、演劇を用いたコミュニケーション教育の方法論的研究に対する問題提起の契機となれば幸いである